



さゆりっ子

No.2

文責 畠林一成

きょうしゅたい

「共主体」の保育って

誕生会の折に保護者とお話する時間の今年のメインテーマが『共主体』です。簡単にお話すると「園児も保育士も保護者も、共に主体性を大切にしていこう」になります。さゆり幼稚園も「主体性を大切にする保育」を推進していますが、保育の主人公は「園児」です。子どもたちのかかわる姿から保育を進めていこうという考えを大切にしています。

『共主体』の保育にはそこに「保育士も保護者も」が加わります。園児を取り巻く保育士、保護者は見守り、後押し役を努めるのも大事ですが、「それだけでは立ち行かないというか、不十分に感じる場面だって実際はあるよね。」というのが現実です。そんなときは保育士も保護者も積極的に子どもたちにかかわり、リードしていきたいです。

「見守り」VS「教育的支援（指導）」のように考えるのではなく、バランスよく、子どもたちの健やかな成長のためにかかわっていきたいものです。

幼稚園の花壇での一コマです。

きれいにチューリップさんが咲いています。

女の子が近づいてくるといきなりポキッと一本折ってしまいました。見ていた私は「エ〜っどうして？」とドキッとしてしまいました。

すると女の子は手にしたお花を近くにいたもう一人の女の子にうれしそうに「どうぞ。」と渡していました。「お花をプレゼントしたい。」という思いから主体性を発揮している姿ですね。

でも、まわりの大人は見過ごすわけにはいきません。

「このお花はみんなで見て楽しむために咲いていてくれるんだよ。」とお話してもいいと思います。

ただ、「子どもはまだわかっていないことが多いんだから、大人が教えないと…」と単純にしつけ論に立つのは要注意。

子どもは大人のように＜周囲のことまで＞考えて判断し、行動することにはまだ発達途上です。（主体性は「自分の主張」と「周囲への配慮」がセットになります。）ですからチューリップを折る子がいるのも当然です。（自由に遊べるお花畑も必要かもとも考えたいです。）

このときに「周囲への配慮」にどう気づかせてあげるかがその子の「主体性」を大事にしているかにつながります。

その時は「お友だちにあげたかったんだね。喜んでくれたね。よかったね。」その子の思い（自分の主張）をまずはしっかりと受け止め、認めてあげる。別の機会に咲いているお花を見て喜んでお友だちを意識させていく。こんな支援も考えられます。ここが保育士、大人の主体性が発揮される場面だと思います。





ブロックでパトカーを作って遊んでいた二人が、ブロックの量で言い争いになった。

一緒にいたSさんが状況を担任に伝えに来た。「ごめんねして、仲直りできたらいいね。」とアドバイスをし、子どもたちに任せることにした。

静かになったなあ様子を見てみると三人でハグしていた。子どもたちだけで解決できたことに成長を感じました。

「自分の主張」と「周囲への配慮」を上手にコントロールしていくのが「折り合いをつける」ことになります。「イヤイヤ期」の子どもは「自分の主張、全盛期」なんですね。なかなか「折り合いをつける」なんていきません。

ブロックを使いたい二人が「自分はこうしたい。」と相譲らず、争いになるのも当然（と受け止めたいし、いい経験の場と考えたい。）。更にいつもなら間に保育士が入ってお話を聞き、どうしたらいいか考えていくのだが、アドバイスをしてこの時は子どもたちに委ねることにした。保育士の主体性が発揮された場面です。

「仲良く遊ぼうよ。どうする？」

「ぼくのブロック、使っていいよ。」

「いっしょに作ろうよ。」（このやりとりは全くの想像です。）

まわりの大人は子どもたちの行動から「周囲への配慮」につながる言動を意識的に取り上げ、認めてあげるように考えていきたいです。この時は子どもたちに委ねたことは保育士にもうれしい成果でした。

お互いを尊重し合い、よりよい関係を創る、グローバルな視点を必要としていくこれからの社会に必要な考えであると思います。

受容と非受容（5/20）

「いつも言ってるじゃない。どうしてすぐに来ないの！」母親の声が響くと、娘はあわてて階段を降りてお風呂場に向かう。お風呂のお湯がちょうどたまるタイミングで母親は「もうすぐだよ。」と前段階の声を掛けるが、遊び込んでいる子どもの方はそれに合わせてあと〇分で終わりにしようなんて見通しをもつことは難しいし、『もうすぐ』にも幅がある。

いつもお部屋で遊んでいる時はどんなにおもちゃを広げようが気にする様子もなく、一緒にやろうと呼ばれれば相手になり切って遊んでいる母親の姿を見かけている。しかしこの時ばかりは声のトーンも違っているし、「待って、あともう少し。」なんて言葉も通じない。“やばい、いつもとちがう”と緊急事態に陥る。

こんなやりとりも日頃、母親が受け入れてくれる（受容）という安心感があるからこそ、受け入れてもらえない（非受容）時に母親に応えようと自分から動き出している娘の姿がある。

受容と非受容は信頼関係にある上で成り立つ。一見、突き放している、感情的な行動に受け止められるかもしれない非受容も、その子と信頼関係があるからこそ、その子の主体性を育てることにつながる。何度か同じようなことを繰り返すかもしれないが、相手の状況を汲み取って自分のできることをしようとする姿につながっていく。

園児には、いつでも、どんなときも自分を見てくれている、自分の気持ちをわかろうとしてくれている先生と過ごせることが信頼の根底になっている。